
国際競技大会参加報告

東京大会フェンシングメディカルサポート・オリパラテニスボランティアに参加して

田中 麻理 (東京スポーツ&整形外科クリニック)

2004年アテネオリンピックで選手の活躍を見て感動し、いつかオリンピックに参加したいと思ったことが始まりであった。今回その夢の舞台であるオリンピック・パラリンピックに参加してきたため、活動の実際について報告する。

フェンシングではメディカルサポートとして参加。会場である幕張メッセは広く、各会場の場所確認や医務室の医療物品の確認、救護バッグ・AED・ストレッチャー・車椅子の位置の確認も行った。フェンシングに多い怪我は足関節捻挫・ハムストリングの肉離れ・ふくらはぎの筋痙攣・TFCC損傷・突き指であり、練習会場では慢性的な足や手の痛みを主訴とする選手が多く、医師が鎮痛剤処方、理学療法士がテーピング施行、看護師は診療の補助や選手対応のカルテ記載等を行った。全体での救急搬送のシミュレーションでは医師・理学療法士が初期対応を行い、看護師はストレッチャーの位置を調整し、搬送時は会場の段差の位置を伝えるなど環境整備を行った。競技会場での対応は主にアイシングが多く、対応者はマスク・手袋・フェイスシールドを着用して感染予防対策を図っていた。大会を通して選手の大きな怪我や新型コロナの発症もなく終了することが出来た。看護師の役割としてこれをしなければいけないという業務はないが、事前準備を行い、自ら必要なことを考え他職種と連携して役割を分担し実践していくことが重要である。

テニスのボランティアはカートドライバーで参加。役割は練習・競技会場間の選手・関係者の安全な輸送、輸送後のカート消毒、交通誘導であった。パラのカートは車椅子を乗せるためのスロープがあり2人がかりで出し入れを行い、車椅子を支えてカートへの誘導を行った。無観客試合ではあったが、ボランティアの観戦は許可され、関わった選手が躍動している姿を実際に見ることが出来てとても貴重な経験となった。

今回東京大会に参加して、選手のひたむきに頑張る姿に感動し、それを支える人々も輝いている姿を見て、今後もスポーツの現場に関わっていきたいと思った。スポーツ現場にまだ看護師は少なく、役割も多くはないが、今回の学会を通して情報や知識を共有し、スポーツ現場で看護師が活躍できるよう精進していきたい。

国際競技大会参加報告

メディカルとして競技特性を知る TOKYO2020オリンピック・パラリンピックを経験して

山本 真広 (伊丹恒生脳神経外科病院)

【はじめに】

2021年夏、1年の延期を経てTOKYO2020大会オリンピック・パラリンピックが開催された。運動指導において競技特性の理解は効率の良いトレーニングやパフォーマンスレベルの向上、障害予防に対して絶対的な理解である。一方でスポーツ救護という物品の確認や処置・対応方法について目がいきがちであり、どのような環境で何をどのように使いつどう動くのか、ルールや特異的動作の理解は乏しい。これでは迅速な対応や、傷病発生の予防も事前の準備も十分にはできない。メディカルとして競技特性の理解がどのような必要性を持つのかをTOKYO2020大会での活動を通して考えた。

【活動時期】

オリンピック:7/20~7/31、パラリンピック:8/23~8/30

【実践内容】

オリンピックではフェンシングとトライアスロン、パラリンピックではトライアスロンのFOPメディカルとして携わった。競技環境や動作も違えば使用する道具も違う。パラリンピックでは身体状況に応じてカテゴリーが複数に分かれる。

フェンシングの場合メタルジャケットを着用し通電機能を利用したジャッジが行われる。AEDは使用できるのか、メタルジャケットはハサミで切れるのか、剣という武器を決まった範囲で動いて相手に当てる競技、防具の範囲や特異的動作は何かを考える必要があった。

トライアスロン・パラトライアスロンではそれぞれ3種目の競技が行われる。スイムではバトルというポジション争いや水質について、バイク・ランではゴール後虚脱時の搬送方法、落車リスク箇所の確認や多重課題対応、パラ競技ではレース用車いすでの操作姿勢が熱中症や外傷リスクにどう結びつくのか、各ステーションの配置確認や四肢欠損・機能不全選手の搬送方法を各関係機関と考えた。

ミーティングを重ねての情報共有、予防の観点から基礎疾患や気象条件確認、動線・受傷リスク箇所の確認にひたすら足を運び、練習会場では選手とも積極的にコミュニケーションをとり競技の理解に努め、現場ではシミュレーションを何度も重ねた。

【まとめ】

限られた環境で迅速な初期対応を行うことがベースにある中で、なぜ・どうしてと要因を様々な視点からとらえ、競技特性を知ることは不測の事態の予見や安心・安全な競技運営に繋がり、選手のベストパフォーマンスの発揮につながるのではないかと。

この経験を通して改めて競技特性の理解を深めていく大切さに気づいた。どのような現場でもスムーズな対応によって選手が安心・安全に輝くことができるよう、多岐にわたる競技特性の理解をさらに深めていく必要がある。

Tokyo2020柔道競技におけるPA 看護師の役割

山田 凌大 (亀田総合病院 高度臨床専門職センター)

【目的】

2021年7月24日から7月31日の期間で行われたTokyo2020柔道競技にてPA 看護師として救護に携わった。COVID-19感染拡大対策と海外選手の対応、救護活動の実際を報告する。

【活動時期・対象者等】

活動時期:2021年7月24日～2021年7月31日、活動時間:8:00～15:00/14:30～ 試合終了

活動場所:日本武道館、対象者:Tokyo2020柔道競技出場選手、各国サポートスタッフ、国際柔道連盟(IJF)役員

【実践内容】

Tokyo2020柔道競技は、国際柔道連盟(IJF)管轄のもと日本武道館にて2021年7月24日から7月31日の8日間実施された。男女個人戦は体重別で各7階級が実施され、新種目として男女混合団体戦が実施された。COVID-19感染拡大により無観客での開催となったが、柔道競技には128か国、計393名の選手が参加した。

Tokyo2020柔道競技では医師19名、理学療法士18名、柔道整復師15名、看護師3名にて救護活動にあたった。救護活動場所は、救護室、マットドクター、ドクター補助、担架隊と複数あり、それぞれ役割がある。救護室は医師、看護師が各2名、マットドクターとドクター補助は各会場1名、担架隊6名に振り分けられた。看護師の活動内容は、薬剤管理、来訪者のバイタルチェック、問診、処置の補助である。活動の際はCOVID-19感染拡大防止としてマスクと手袋、ゴーグル装着に加え、来訪者の体温チェック、処置後のベットや物品の消毒を徹底した。救護対象者は上記の通り、選手だけでなく、サポートスタッフやIJF 役員を対象としており、外傷での来訪だけでなく気分不快などの訴えも多く見られた。海外選手への対応は、オリンピック委員会より準備されたPOCKETALKを用いて、コミュニケーションを図った。救護室には看護師2名が常駐するため、問診と処置の補助で分担し活動にあたった。

今大会では幸い頭部外傷または頸椎損傷の症例はなく終えることが出来た。しかし、肘関節脱臼や膝蓋腱断裂の症例があり、必要時オリンピック傷病者対応施設や選手村への搬送例も見られた。

【考察・まとめ】

今回、Tokyo2020柔道競技での救護活動の実際を報告した。国内大会やTokyo2020に参加された医師が統括する学生大会などでは、看護師の参加が確立されている。しかし、地方大会などでは医療サポートが不十分であると聞く。Tokyo2020をきっかけに国内大会に限らず、地方大会にも充実した医療サポートを拡大していきたい。今後も積極的に活動を続け、発信していく。

国際競技大会参加報告

競技スポーツナースとしての役割と実践

大迫 絢一郎 (筑波大学附属病院 看護部)

【目的】

はじめに本学会において健康スポーツナース(健康運動看護師)の役割を、運動療法を必要とする患者、健康づくり運動あるいは競技スポーツの実践者に対し支援するために、看護職として必要な知識と技術を修得し、十分なサポートができる能力を有する看護師としている。また、スポーツは大きな分類として、健康(生涯)スポーツと競技スポーツとに分類され、前者は健康の保持増進やレクリエーションを目的とし、後者はスポーツ技術や記録の向上、勝ち負けが主な目的となる。私はこれまで後者の競技スポーツにおいて、看護師としてチーム帯同してきた経験を持つ。今回、競技スポーツナースとしての専門的な知識や経験をお伝えし、今後のスポーツナースの役割・枠組みにおいて、より細分化かつ専門化されていくことで、スポーツナースとしての存在価値を示していきたい。

【活動時期・対象者等】

なでしこリーグ所属チーム 専属帯同ナース

【実践内容】

障害の予防とコンディショニング(月経管理等)、健康(外傷・障害)管理、救急処置、医療連携(チームドクターとの連携)、検査・測定と評価、スポーツ栄養指導、メンタルケア、教育的指導(コロナ感染対策)、遠征帯同等

【考察・まとめ】

健康スポーツナースの役割は、子供から高齢者、また健康づくり運動から競技スポーツと幅広いスポーツ実践者を対象としている。現状、スポーツナースの認知度は低く、役割の周知まで至っておらず、スポーツ現場とのニーズに不一致が生じている印象を受ける。そのため、スポーツに関わる看護師として何ができるのか、どのような利益を提供できるのか、改めて追求していく必要があると考える。本学術集会において、スポーツナースとしての活動・実践を示していくことは、今後のスポーツナースの存在価値を高めることに繋がると考える。そして、スポーツナースとしての役割をより細分化し、その専門性を適材適所にて活用し、スポーツ現場での価値を見出していく必要があると考える。今回、競技スポーツに関わる看護師として、チームの勝利を目標とし、日々の障害予防や月経・栄養管理などのチーム全体のコンディショニング、また外傷・障害発生時の救急処置・データ管理、チームドクター・医療機関へのコンサルテーション等の活動・実践報告にて、「競技スポーツ」に関わるスポーツナースとしての役割・価値を示していく。

健康スポーツナース救護アルゴリズム

望月 麻紀 (榊原記念病院 ACU/CCU)

【目的】

近年、多種多様なスポーツが広まり、新たにオリンピック種目になるまで普及しているスポーツもあります。また、スポーツを楽しむ人口も増加し、その年齢層も広がっています。現在、COVID-19の影響でスポーツ大会の中止や無観客での実施が余儀なくされていますが、ワクチンの普及や治療方法の向上により、スポーツ大会が日本各地で再開される日が訪れることでしょう。その時、感染予防策を熟知し全身状態を観察できるノウハウをもったスポーツナースの必要性はさらに高まるのではないかと考えます。

スポーツ大会でスポーツナースが活躍する際、より適切かつ迅速な対応が行えるよう、看護師の特性を活かしたスポーツナースのための救護アルゴリズムが必要になると考え、当学会のスポーツナース活動推進委員会のメンバーが作成しました。

【活動時期・対象者等】

今回作成したアルゴリズムは、成人の競技者を対象にしたアルゴリズムです。熱中症、脳震盪、靭帯損傷(足関節と膝関節)に焦点をおき作成しています。

【考察・まとめ】

今後、このアルゴリズムをもとに勉強会またはセミナーを開催し、健康スポーツナースの皆様とともに実践演習を踏まえて学ぶことで、スポーツ大会の現場で、競技者が安心してスポーツに取り組み、救護要請が発生した際にはより適切な対応を行い、発生した傷害を最小限に抑えることで競技者の早期復帰をサポートするツールとなることを願っています。